

ろうきん森の学校 20 周年記念シンポジウム

報告書

目次

1. パネルディスカッション

「里山コモンズとしてのろうきん森の学校の意義」	1
-------------------------	---

2. 当日報告資料

リレー報告「ろうきん森の学校の 20 年のあゆみ」

1) 全国事務局	27
2) 福島地区	34
3) 新潟地区	41
4) 富士山地区	48
5) 岐阜地区	53
6) 広島地区	59

3. 参考資料

1) さとやまコモンズ自然学校とは（ひろしま自然学校 古本敦子氏）	67
2) さがみこファーム事業紹介（さがみこファーム 山川勇一郎氏）	73
3) NPO とは何かを考える（慶應義塾大学 宮垣元氏）	84
4) 当日配布資料（ゲストプロフィール、5 地区概要等）	88

※シンポジウムの映像は右 QR コードからご覧いただけます。
(ろうきん森の学校公式 Youtube チャンネル)



ご挨拶

労働金庫連合会 50 周年記念社会貢献活動として 2005 年 10 月に開校した「ろうきん森の学校」は、おかげさまで 20 周年を迎えることができました。2025 年 3 月 14 日には、労働金庫連合会にて、20 周年記念シンポジウムを開催しました。

これまでご支援くださった皆さまに心より感謝申し上げます。

「ろうきん森の学校」は、日本の里山再生をテーマに、労働金庫連合会が活動資金を支援し、NPO 法人ホールアース自然学校を主管団体として実施する環境教育事業です。

- ①森を育む（植樹、間伐・下刈り等の森林整備活動）
- ②人を育む（森づくりや環境教育リーダーの育成）
- ③森で遊ぶ（里山を活用した自然体験・環境教育プログラムの開発と実施）

という 3 点を活動の柱として位置づけ、現地の NPO が中心となって地域の皆さんと共に多様な取り組みを展開してきました。

福島（いわき市）、富士山（富士宮市他）、広島（北広島町）の 3 地区で 2005 年度に開校し、2014 年度まで 10 年間にわたって活動してきました。さらに 2015 年度から、ろうきん森の学校は、労働金庫連合会 60 周年記念社会貢献活動としてさらに 10 年間を「第Ⅱ期」と位置づけ、新潟（上越市）および岐阜（美濃市）の新たな 2 地区を加えた合計 5 地区で、「森づくり」から始まる「人づくり・地域づくり」につなげる環境教育を、さらに発展させることを目的として事業を継続してきました。

2025 年 3 月末時点で、のべ 28 万 6,203 人の方が活動に参加し、企業と NPO が協働で取り組む活動としては、全国に例を見ない実績となりました。こうした実績を踏まえ、ろうきん森の学校は SDGs 達成目標の 2030 年に向けて、引き続き取り組んでいくこととなりました。

2030 年に向けて、日本の里山地域はこれまで以上に過疎化・高齢化等の影響を受け、様々な社会課題の最前線となるでしょう。私たちの役割は、過去 20 年間の成果と課題を整理しつつ、これからの日本の社会に求められる視点をしっかり盛り込んだ質の高い活動を、地域の方々や労金関係者、現地 NPO と共に推進していくことだと考えております。

森での活動を通じて人と人、人と地域が健全に育まれる社会の実現を目指して、皆さまのご支援を賜りながら、「ろうきん森の学校」はこれからも歩みを進めてまいります。

2025 年 3 月

ろうきん森の学校全国事務局

（NPO 法人ホールアース自然学校内）

【開会】

それでは定刻となりましたので、ただいまから『ろうきん森の学校 20 周年記念シンポジウム「里山コモンズ自然学校としてのろうきん森の学校の意義」というテーマで、企業と NPO の協働による森・人・地域を育てる 20 年間の活動の軌跡と未来、ということで進めていきたいと思います。

本日、進行と後半のパネルディスカッションのコーディネーターを務めます、全国事務局を担当しているホールアース自然学校の大武と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

開会に先立ちまして本当に長きに亘ってご支援いただいている、労働金庫連合会の古川副理事長より一言ご挨拶をお願いいたします。

【古川副理事長あいさつ】

皆さん こんにちは。ただいまご紹介に預かりました労働金庫連合会で副理事長をしております古川でございます。よろしくお願いいたします。本日は、この東京神田の会議室に NPO の代表の皆さんはじめ 13 金庫の CSR 担当の皆さんがお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。



ろうきん森の学校も 20 年経ちまして、本日 20 年記念としてこのようなシンポジ

ウムが開催されることを大変嬉しく思っていますし、ありがたくも思っております。これまで皆さんご存知の通り、森の学校は全国 5 地区になりました。20 年間の参加のべ人数ですけれども、28 万人という大変多くの方が参加されたということでございます。本日も各地区の活動のまとめを報告いただくとともに、里山コモンズ自然学校というテーマでパネルディスカッションが開催されるということ、大変楽しみにしております。

最近、現代病というか「豆腐のメンタル」を持っている人がたまに出ますが、やはり木々とか森とか自然の中に行った方がやはり人間は心身とも健康になる、というところもあって、ろうきん本体としても森の学校を利用させていただいて、新入職員から研修をしたり、メンタルで休むような人がいればできれば、家に閉じこもって休むのではなくて、森の学校で自然の中で体を動かした方が本当は健康なんじゃないかと、私は個人的には思っております。

先ほどのべ 28 万人という参加者、というお話させていただきましたが、私個人的には何回も参加しているわけじゃなくて少ないのですが、監事をやっている糸谷さんが、その分活躍していただいて、28 万人のうちですね 1% ぐらいは行っているんじゃないかな、という風にも思っています。10 年・20 年を 1 期、2 期って続けてきたわけで ございます。これを周年記念行事としてやってきたわけですが、今回一応 20 年を区切りとして、周年行事としては区切らせていただき、今までと同様に様々な形で応援、または必要なものに対しては協力させていただく、という体制を整えていきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

20 年経ちましたけれども、この先 10 年、20 年って続いていければなと思っていますし、様々な形でもっと我々も参加する形を、色々変えながらもできればなと思っております。

ます。労働金庫連合会も3月23日でちょうど70年を迎えますけれども、特に70年だから何かするかというとそんなに派手なことはしません。しかし、区切りとしてまた様々な形で皆さんにご案内させていただきたいと思います。これからもろうきん森の学校を様々な形でサポートしていきたいと思いますので、今日のパネルディスカッションも含めどうぞよろしくお願いします。

簡単ですがご挨拶させていただきます。よろしくお願いします。

【全国事務局と5地区のリレー報告】

※報告資料参照

【報告を聞いての感想や質問】

○静岡県労働金庫 富田氏

静岡ろうきんの富田でございます。報告ありがとうございます。たまたま私も今日、参加させていただいて後ほど情報交換会で少しご挨拶させていただこうと思っております。決して森オタクではないのですが、福島地区の「湯の岳山荘」に行ったことがあり、自然体験させていただきました。木田さんとはあの震災の直後にボランティアに行かせてもらって、当時やっぱり被災された方の痛みというのですか、そんなことを夜通し話したなっているのを思い出させていただきました。



グリーンウッドワーク協会の小野さんも、

労福協関係の視察でろうきん森の学校に指定される前に行ったことがあります。生木を使ってスプーンを当時作って、今も大切に持っています。

地元の富士山地区では、ホールアース自然学校とたまたま私が地元の支店長をやった時に、色々連携させていただきました。特に山崎さんからお話があった、あのコロナの時の辛かった時の話です。活動が止まってしまったということで、今日司会をやっている大武さんとも色々お話をさせていただきました。ろうきんの場合、金融事業を通じて働く方々とその家族に対して幸せづくりをしていくということなのですが、地域のNPOが本当にこう活動ができない、そして労働組合活動もその時はやはり活動が止まってしまったということで、どうしたらいいか非常に悩みました。コロナの事を思い出すと、皆さんも三密がダメだとか、飛沫を防ぐということで、プラスチックパネルなんか置かれ、全くこう建物の中で何かをやるってことができないと状況でした。じゃあ一体どういうことができるのだ、ということでホールアース自然学校さんと色々話をしながら、野外活動はできるのではないかと。

今日またお話を聞かさせていただいて、当時労働組合もこのまま何年もこれが続いたら労働組合費を引き下げるという話になってくるのではないかと、ということで非常に悩んでいました。金融需用以外になりますが、そういった地域のNPOそして労働組合が悩んでいるところを、うまくマッチングさせてその活動が今も継続しているということで、本当にいいきっかけだったなと思っております。

これからもこういったNPOとの活動っていうことも当然続けていきたいですし、引き続き地域のそういった活動は応援していきたいと思います。以上、感想を含めてですがありがとうございます。
○労働金庫連合会 糸谷氏

労働金庫連合会の糸谷です。富田さんの話を伺って喋りたくなっちゃったので、ちょっとだけ。冒頭副理事長の挨拶で、のべ人数の 1% ぐらいはお前だ、みたいなことを言われました。そうすると 2800 人でちょっとそれは無理だと思うのですよ。でも、思い出してみると 100 回以上は参加しているなどは思います。



ろうきん森の学校には、2 年目から携わらせていただいています。私どもの職員と各地区さんとの関わりという部分で、一言申し上げたかったのは、やっぱり最初ちょっと距離感が互いわからなかったというのがあります。おそらく NPO の皆さん方は、こちらがある意味スポンサーですので、ちょっと気を遣われる部分もあったのではないかと。今だから言うのですが、やっぱり少しくさん臭い団体じゃないか、と若干そういう思いがありました。もちろん支援をさせていただき意義を認めたから、やらせていただいたのですが、具体的にどういうコラボをしたらいいか分かっているのか、と問われるとちょっとピンと来ないところは正直ありました。それで 1 つの試みとしてお金を出して終わりというのでは意味がないな、ということで職員自身が現地にお伺いをしてきました。ほとんど何の役にも立たないと思いつつも、参加をすることで

我々も活動が実感できるし、NPO の皆さんも支援してもらっていると、「金だけじゃなくて人も来た」と受け止めていただけるのではないかと。

最初は非常に無理をしながら、いわきに行けば温泉に入れるぞとか、富士山に行けば富士宮焼きそばが食えるぞとか、広島に行けば宮島へ帰りに寄れるぞとかですね。そんなことも言いながら職員を引き連れて、訪問させていただくところから始まり、今では若手もそういった部分を引き継いでくれて、ごくごく自然に NPO の皆様と職員が交流させていただきながら一緒に活動させていただく、ということはあるようになったと大変ありがたく思っております。

私もかなり老兵の部類に入ってしまったので、体力を維持してですね、できることは限りがあると思うのですが、今後ともよろしくお願いします。

【第2部 パネルディスカッション「里山
コモンズ自然学校としてのろうきん森の学
校の可能性」

大武：進行とコーディネート役を務めます、
全国事務局ホールアース自然学校の
大武です。よろしくお願いいたします。
まず冒頭に一言、声を出したほ
うが良いと思うので、パネリストの
皆さん、簡単にお名前と所属、今の
気持ちをお話してください。最初にゲ
ストコメンテーターとしてお招きし
ている慶應義塾大学の宮垣先生から
お願いします。



宮垣：初めまして。慶應義塾大学の宮垣と
申します。どうぞよろしくお願いいたします。
私はNPO研究をしている
学者の立場で今日は呼んでいただい



たと思うのですが、私がこの研
究を始めた時ってというのが1990年代
で、阪神淡路大震災が今年30年です
けども、そのちょっと前ぐらいなの
です。その時はNPOという言葉はも
ちろんあったのですが、ほぼ
誰も知らなくて、災害ボランティア
というの「ボランティア」なのだ、
ということが社会的に気づかれました。
そういう時代でその後NPOって
言葉が一般的にこう知られるようにな
ってくるのですけども、今日伺っ
てその30年経って当たり前のように
NPOという言葉が共通言語になって
いるってことが1つの感銘とい
うか、感慨深いものがあります。

もう1つは、同時にそのNPOという
言葉があまりにも一般的になっているの
だけども、よくよく考えるとその存在
ってよく分かってないかもしれないこ
ともあると思います。そういったこと
も今日一緒に考えていければいいのか
なと思って、楽しみにしております。

大武：続いてゲストパネリストの1人とし
てお招きしている山川さん。実は元
同僚でホールアース自然学校出身で
す。今さがみこファームという新し
いソーラーシェアリングの組み
組をされています。

山川：山川です。ろうきん森の学校に育
ていただいた1人だと思っております。
私は2003年にホールアース自然
学校に入って、2014年に辞めたので
ちょうど新潟と岐阜の皆さんとは入
れ違いでした。立ち上げから最初の
10年を担当させていただいたというこ
とです。「森を育む・人を育む・森で
遊ぶ」をテーマに、地域と共に歩む
というコンセプト作りみたいなところ
から関わっていたので、懐かしい

なと思いながら聞いていました。なるほど、原点がここにあったのかと改めて思いました。フィールドは違うけれども、ほぼ同じようなことやっていると感じました。



古本：ひろしま自然学校の古本と申します。今日こうやって皆さんの前で話をさせていただく機会をいただき、ありがたく思っております。自然学校の代表しているのですが、広島では新井監督と同期で、今年で2年目が終わりました、来年3年目ということになります。スマートには話せませんがよろしくお願いします。



渡邊：新潟地区のかみえちご山里ファン倶楽部から参りました渡邊です。よろ

しくお願いいたします。皆様のお手元にあるご案内のところにプロフィール載せていただいたのですが、ちょっとドキドキしながら見て、今日お話をさせていただくのはきっとこんなに緊張しているのはこの格好のせいだと思います。いつも森の学校でフィールドに出ている時の制服はこんな格好ではないです。



山崎：ホールアース自然学校の山崎です。このろうきん森の学校は20周年ですが、5年・10年・15年という節目で必ずこういうフォーラムをやってきました。これはほぼそうなのですが、それでも「森の学校」という響きのイメージから、木を植えて木を切って、自然観察のハイキングをして、という活動が多分思い浮かぶと思います。これは決して嘘じゃなくて日々そういうこともやっているのです。今日タイトルにもあるのですが、ろうきん森の学校の意義というのは、実はそういう目に見える体験の向こう側にもっとあるのではないかと。普段の活動の中では語り尽くせないような意義があって、そういうところについては5年に1回ぐらいはもう1回この現代的な意義と未来に対して、どうやって行こう

かまとめた方がいいのじゃないかということで年ごとにやらせていただいて、今日もそういう時間なのかなと理解しています。森が好きな人たちの趣味の活動みたいに映りがちなのですが、決してそうじゃないのだというところを、宮垣先生と山川さんにフォローしていただきたいと思っています。

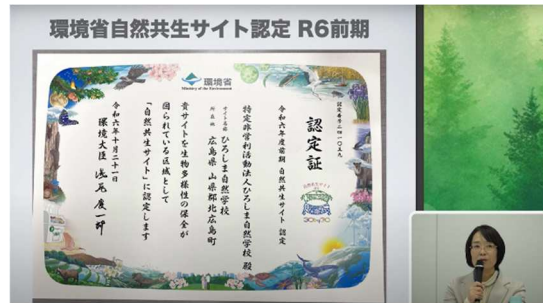
大武：皆さんありがとうございました。最初に話題提供ということで、「里山コモンズ自然学校」とは何か、どういう経緯でこのテーマが出てきたのかご紹介いただけますでしょうか。

古本：それでは少し時間をいただいております。里山コモンズ自然学校という言葉は、ひろしま自然学校が20周年を迎えて次の10年を考えた時に出てきたキーワードでもあります。なぜそれに至ったかと、その言葉にどのような意味を込めているのかということをお話させていただければと思っています。広島の話ではあるのですが、他の皆様にも共感していただける部分があればと思いながらお話をさせていただきます。

【里山コモンズ自然学校について】

昨年の10月にひろしま自然学校が環境省の自然共生サイトっていうものに認定されました。最近、“ネイチャーポジティブ”とよく言われますけども、世の中の生物多様性保全の流れの中で、2030年までに陸と海の30%を生物が保全されている区域にしていこうという動きがあります。保護区以外の民間の活動をしているエリアも保全区域として登録していきましょう、という流れになっており、今回私たちひろ

しま自然学校は、自分たちのフィールドを自然共生サイトとして申請し、認定していただきました。



認定までの準備の段階で、私たち現場でかなり汗をかいたのですが、そのときやはり「ろうきん森の学校のスキームがあってこそ、認定してもらえたことができた」と実感しました。

ここで、改めてなぜ今生物多様性保全なのか、という話をさせていただきます。地球環境問題に様々な対策がありますが、現在は、生物多様性保全がトレンドのような形で注目されていると思います。そう言われるようになった背景に、世界の経済が自然の資本に依存しており、動植物に依存しているGDPが世界のGDPの52%というデータがあります。つまり、生物多様性を損失すると、経済にも大きなリスクがあるということなのですね。例えば、原材料は様々な動植物に依存しているので、調達に影響があったり、消費者の需要や投資家の意識も変わっているので、生物多様性に配慮しないことがビジネスにとって様々なリスクを生んでしまうということになります。

そういった世界の動きの中、環境省としても、生物多様性保全を進めていくには地域で地道に保全活動をしている団体と企業がマッチングするのが効果的だということで、大々的に進めています。実際に私の周りの団体も、環境省に相談して企業を紹介してもらった例があります。また、県や自治体でもそういったマッチングの仕組みを

独自に整えているところが出てきています。企業が団体を支援するということは、まさにろうきん森の学校の枠組みなのですけれども、やはり、これが20年継続されているというところが大きいと感じています。長年支援していただいたおかげで、広島地区の例で言うと、ゼロからハード面が整備でき、専従の職員を雇うことができ、さらに全国の他の地区との連携によって活動の質がすごく上がったというのが実感としてあります。

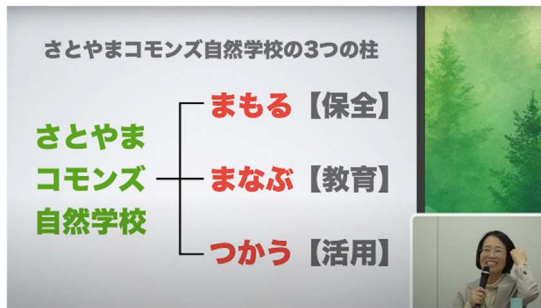
先ほどありました自然共生サイトの申請手続きにあたって、私自身、自然学校の姿を改めて捉えなおすことができました。この申請にあたって、必要な情報がいくつかあるんですけど、まずは土地の境界図を書かなければならないので、土地の範囲をもう一度見直すということ、そして、地権者に対し申請への理解と許可を得なければならないということ、それから、モニタリング調査の情報を整理し生物多様性の価値を可視化すること、最後に、今後の方向性や計画を明示する必要があります。そういった書類を整理していくプロセスの中で、自分たちは「里山コモンズ」なんだと改めて感じました。

「里山コモンズ」は、里山を活用するために共同管理をしている、というようなイメージです。全国の自然共生サイトは、生き物を守ることが第一の目的にある場合も多いのですが、私たちの場合は、あくまでも里山を自然学校として活用してきた結果、生き物が守られてきたということが特色だと思っています。コモンズというのは、「共有財産」といったような意味なのですが、例えばある集落で、山の中で範囲を決めて、その中で集落の人々が薪をとっていいようにルールを決めることが昔はあったかと思います。そのような、クローズドなエリアを共同で管理し、共通の利益を得

るということが、コモンズの従来のイメージです。ただ、ひろしま自然学校の場合は、7人の地権者さんと水利組合の方にご理解いただき土地を10年単位でお借りしているんですが、クローズドな場所ではなく、誰もが気軽に利用できる里山として開放してくださっています。つまり、自然学校的な「さとやまコモンズ」とは、地主さんのような里山に縁とゆかりのある人が、外から来た縁もゆかりのない人に対して、個人の所有物である里山を開放することで様々な縁を生み出し、それが結果的に里山の課題解決につながる、といった枠組みになります。実際に、長年森の手入れをしてくださっているボランティアの方に話を聞くと、「自分たちはここで遊ばせてもらっているんや」「楽しませてもらっているんや」というように言うてくださっていて、私たちは本当にありがたいなと思うと同時に、里山の活動がそういった方々にとってのウェルビーイングになっているのかなとも感じています。

不易流行という言葉がありますが、やはり、昔からあるコモンズに対して、新たなコモンズ概念を創造していくことも大切かなと思っています。今までの、閉鎖的であったり、画一性があったり、強制力があつたコモンズから、開放性があり、多様性があり、ゆるやかなつながりがあるという在り方のコモンズを運営していく方がいいのかなと、20年をふりかえって皆で考えたところです。

さらに、自然学校的さとやまコモンズを持続可能にするために、大切だと思う2つのことがあります。ひとつは、いろんな市民の方が、民主的・水平的にコモンズの共同管理に参加・参画すること。もうひとつは、里山が人間だけではなく全ての生き物、みんなのコモンズだということをベースに考えるということだと思っています。



さとやまコモンズ自然学校には「まもる」「まなぶ」「つかう」という3つの柱がありますが、これはろうきん森の学校の指針にも当てはまるかと思います。やはり、「まもる」というのがちゃんとあるのがろうきん森の学校だなと思います。保全活動や森の整備を継続していくことに価値がありますし、さらに「まなぶ」が充実しているのが、自然学校らしい自然共生サイトだと思います。そして「つかう」ことで、自分たちもメリットを感じたり、ウェルビーイングを感じられ、結果として人が集まり収益をあげられるというところが経済的な持続可能性につながっていくと思っています。

この3つの柱を軸に、今後10年の活動を進めていきたいと思っています。

大武：古本さんありがとうございました。

実はこの話、昨年12月に広島地区で中間事務局会議が開かれ、その場でひろしま自然学校前代表の志賀さんから、こういうコンセプトで次の10年の活動を考えているのだけれどもみんなどう思う、みたいな形でご紹介いただいたのです。その時初めて「里山コモンズ自然学校」と聞いて、なるほどろうきん森の学校で自分たちがやってきたことが、こういう形で整理できそうだなと、非常に腑に落ちた感覚を今でも持っています。古本さんの発表を受けて富士山地区

の山崎と新潟地区の渡邊さんに最初に質問です。里山コモンズ自然学校というこのコンセプト、率直な感想というか受け止めをそれぞれ聞かせてください。

山崎：コモンズってなかなか聞きなれない方もいかもしれませんね。共有資源とか共有地と言われるのです。要はみんなのものということです。学生の頃、経済を勉強した人は「共有地の悲劇」というのを聞いた人もいるかもしれないのですが、この背景には日本の環境問題っていうのは、人が化石燃料を使いすぎで起こる気候変動みたいな環境問題と、



里山のように人が関わらなさすぎて生態系が荒れていくとか、地域が衰退していくという、利用しなさすぎの問題があるのです。利用しなさすぎ問題を解決していくために、ろうきん森の学校もあって、人がどんどん来るようになって開かれた共有地を「里山コモンズ自然学校」というネーミングにすれば可能性があるのではないかという話だったのです。ただ「共有地の悲劇」というのもあります。これは「みんなのもの」だということで、誰かが自由に使い過ぎてどんどんその資源を利用しよう

とすることで、一気にダメになるっていう側面があります。これはコインの裏表の話なのですが、僕が今後向こう 10 年、20 年行けるのではないかと思ったのは、悲劇が起こるっていうことも含めて地域の活動に根差した、本当に土着の NPO がコーディネートができる能力を持ってきたということだと思います。

共有地の悲劇が起こらないように、地域をある程度ゆるくつなぐということ古本さんも言っていましたけれども、緩い合意でコーディネートできるのじゃないかという自信があって、あのコンセプトが出てきたのではと思います。これがろうきん森の学校全体のコンセプトにこれからなっていくとするならば、他の地区も地域でそういう振る舞いができるよう、もっと磨きをかけていかなきゃいけないのかなと気持ちを新たにしていたところです。

渡邊：改めてこのお話を伺うと、私たちが新潟でがむしゃらにやってきたことが、こうやってなんかすごくすっきり整理していただいて、私たちのことを言ってくれているみたいな感覚になります。自分たちはこんなこと意識してはいないけれど、でもこういうことだと思ってやっていると、私たち自身のモチベーションも上がるし、これを地域の方が聞いてくださったら、ものすごく嬉しいのではないかという言葉がたくさん出てきます。地域の中で活動していく時に心がけていることで、もう 20 数年やっている NPO ですけれども、最初の時からやはり地域とどう関わっていくかというのが、1 番大きなテーマでした。私は地元上越市の出身ですけれども、私以外のほとんどのスタッフは県外出身です。私たちのと

ころも最初は「何しに来たんだ？」から始まり「やれるものならやってみろ」、「やりたければやればどうぞ」となり、そのうち「ああ、何かやっているね」となっていました。うちの地域の良かったところは、やっていることを認めてもらうまではまだまだかもしれないですけど、やってもいいよっていう許可が出る段階まで行けました。何年目かっていうのは、今は思い出せないですけど、そのような段階を踏んで地域の人と一緒にやってもいいかなぐらいのところになってくると、この里山 commons の緩やかなところが出てくるかな。私たちがやりたいというよりは、地域の方が何をやりたいのか、から始まり、それを私たちはどういう風に、支えるというよりは、私たちも一緒にやらせてもらいながらだと私たちも嬉しいし、地域の方も「おっ」てなって、どんどん繋がっていくことが非常に嬉しいです。それが私たちのやり方だったのですが、地域の方々ってそれに気づいていなくて、私たちは「皆さますごいですね」と言うのですが、「いやいや」と言って…。なんて言うのですかね、自分たちの価値に気づいていないか、私たちはもうその皆さんが価値に気づいただけで私たちの人材育成の役割は終わりです、といつも言っているのです。新たな人を育てるというよりは、皆さんが自分たちの価値に気づくのが一番の人材育成だと私は思っているんです。この里山 commons の話は、地域資源を共有するという許しをもらって私たちも活動できている、というところから新たな活動も生まれてくるのじゃないかなと考えています。

大武：渡邊さん、ありがとうございました。

そうですね、新潟のかみえちご山里ファン倶楽部が活動している上越の中山間地は、私も何回か行っていますけれど、本当に雪深い地域で、棚田が残っている集落もあり、非常に美しいところにあります。でも一方で、渡邊さんがおっしゃったように、ある意味閉鎖的な部分もあるかと思うのですが、やっぱりそういったところでずっと活動されてく中で、先ほどおっしゃっていた地元の人たちが自分たちの価値とか、やっていることの意味に気づくことはすごい大きなことだし、それはまさに外部との交流があるからですね。その里山コモンズ自然学校が今、ろうきん森の学校の各地区の共通テーマでできそうだと、なんか腑に落ちたっていう話が出ています。次に、山川さんに投げかけなのだけれども、自己紹介で森の学校に育てられたとありました。その経験も踏まえて、取り組んでいる「さがみこファーム」のソーラーシェアリング事業のことも絡めて、里山コモンズ自然学校的な観点で、さがみこファームの取り組みや、「まもる・まなぶ・つかう」という観点で、重なっているところがたくさんあると思うのです。そこになぞらえてお話しいただけますか。

山川：はい、ばっちり重なっていると思います。この写真、ブルーベリーですけどもブルーベリー農園をやっています。ホールアースを辞めて、ろうきん森の学校の活動を離れてから、大体10年ぐらい経ちます。その間、太陽光発電の仕事をやりまして、今もやっているのです。屋上の太陽光発電から入って、今はソーラーシェアリングといって、農地で太陽光発電事業をやっています。その際、農

業法人を立ち上げて農業もやることに結果的になったという感じなのです。この3月に認定農業者というのを取ったので、名実ともに農業者になったっていうことで発電事業と農業の2つをやっています。ただ世の中の的にはエネルギーの問題も、農業問題も非常に大きな問題ではあるのです。けれども、このソーラーシェアリングっていう風に言われているのがですね、ある種ミスリードされて、逆に地域とトラブルを生んでしまっているケースっていうのが結構あります。つまり事業者が太陽光発電をやりたいがために農地を悪用する。でも農業は真面目にやらないっていうケースが全国で多発しています。そうすると逆に、マイナスになっちゃうのですね。ですからそういったことがある中で、まさにこの里山コモンズ的な考えがすごく大事なんじゃないかなという風に今改めて思った次第です。では、これからさがみこファームの事業紹介をさせていただきます。

【さがみこファームの事業紹介】

山川：私は、この後話される宮垣さんの後輩で、慶應義塾大学のSFCの卒業です。ろうきん森の学校をやっている時に社会人入学しているのですけれども、ちょうど論文をろうきん森の学校をテーマに書かせてもらったのですよ。それで論文を書いている最中、あの東日本大震災が起きて緊急支援の活動に行かせてもらったことが、エネルギー事業に関わる直接的なきっかけです。今、2つ会社やっていて、いずれも社員10人以下ぐらいの小規模でやっているのですけれども、食とエネルギーで自然と調和した地域の未来を作るっていうのが共

通のコーポレートミッションです。こういう形で相模原市という、神奈川県で3番目の政令指定都市ですけれども、山間部で元々郡部だったところを広域合併して現在の相模原市になりました。山間部でこんなところにうちの農園があります。今日初めて聞いた方がいらっしゃるかもしれないですけれども、電気と農作物のある種二毛作です。同じ農地を立体的に上と下で活用することで、発電も農業も両方やるってことなのです。これをやることで農業の持続性が向上する。農業だけでやっているとなかなかいかないようなところに発電事業の収入が入ることで、結果的に農業の持続性が高まる。これがソーラーシェアリングの大義です。私たちはそこに体験的な要素を加えて、これがまさにろうきん森の学校のようなことをやっています。

さがみこベリーガーデンという名前で、ブルーベリーは6月から8月の夏が収穫時期なので、いろんな人がここに来て体験的に学ぶことができるような感じです。36種類ブルーベリーを育てていまして、こんなでっかいやつもあるんです。これ僕の手なので巨峰ぐらいです。これブルーベリーなのですよ。びっくりしますよね。こんなやつがいっぱいあります。ホールアース自然学校のメンバーも前に来ていただいて、たくさん食べてもらいました。蜂蜜は授粉用に養蜂もやっていまして、去年は3000kgぐらい採れるので結構たくさんあります。こんなことで地域共生型ソーラーシェアリングというような、そういうことを言っているのです。まさに地域内外が一体となったような事業展開を心がけています。

農業地域エネルギーの課題解決を目指すということで、これはあのろうきんさん、労働組合さんと非常に関わりが深いと思うのですが、これは生協さんですね。生活クラブという生協さんと共同で事業をやっています。

そもそものきっかけは東日本大震災で、コンセントの向こう側っていうのを強烈に意識したのがこの事業をやるきっかけです。当時、私には息子が2人いて、こんな感じで小学校に上がる前だったのです。上が今度、大学生なので大きくなりましたけれども。やっぱり子どもたちに安心・安全な未来を残さないといけないということで、何が必要かと考えた時、やはり水と食、エネルギーこれだろうと思ったのです。こういったものを1つ1つ自分たちの手に取り戻していかないといけないじゃないかと。地元が多摩なので、有志でビジネスを立ち上げました。ちょっとこう山の方なのです、相模原市は橋本駅というとターミナル駅があり、そこから30分ぐらい山の方に入ったところ。都市に近い田舎という感じです。近くに小中学校がありまして、その奥の集落の小中学校4校が5年前に合併して1校の公立の小中一貫学校になったのです。ここの生徒数は1学年7人ですので、もう過疎ですよ。相模原市は神奈川県3番目の都市ですけれどもこんな状態です。農地ですけれども、こんな状態から開拓したということです。社会課題というのは見ればすごく難しいこといっぱいあるわけです。ただ私たちのアプローチとしては、こういったものに関してなるべくポジティブに取り組みたいということ

で、まずはソーラーシェアリングで太陽光発電の売電収益を確保しますと。そうすると割と不安定な農業収入を安定的に補うことができ、農業だけでもやっぱり自立していく必要があるだろうってということで、色々栽培方法を工夫したり、観光とか教育とか、このあたりがろうきん森の学校的ですね。いろいろ掛け合わせながら関係人口を増やしていった地域に貢献するという、そんなアプローチです。ですから電気と農作物の生産活動というのはしているんですけども、それを軸に置きつつ、たくさんの人に関わってもらって気づきのきっかけを与える。それが地域に新たな仕事を作ることにも繋がりますし、エネルギーのインフラ維持にも繋がって いくだろうということです。

いろんな人たちが、いろんな形で仕事として関わる——そんな受け皿を作っています。例えば、子育て中のお母さんたちが、幼稚園に子どもを送ったあとに「ちょっとだけ働きたい。でもフルタイムは難しい」という状況があります。そんな方たちに、ブルーベリーの選別や出荷の仕事を担ってもらっています。また、この地域は獣害などの被害も深刻で、ある種の社会課題の最前線にいます。まさに「里山」は、人と自然の境界部分。だからこそ、ここは生きた学びの場になると実感しています。ありのままの姿を見せ、そこに人が関わっていく——それが私たちの「森の学校」での実践と通じています。こうした体験を通じて、気づきや行動の変化が生まれると信じています。

現在では、小学生から企業研修まで、年間で 50 団体ほどが訪れてくれています。太陽光発電ならではの取り組みとしては、地域防災との連携もあります。たとえば、地域で全停電が起きた際には、私たちの発電所を使って電力を無償で供給する仕組みを作っています。これは、地元自治会と協定を結び、バッテリーを自治会が所有することで実現しています。こうした取り組みを通して、私たちの存在が地域にとって「来てよかった」と思ってもらえるようなものになることを目指しています。教育、観光、スポーツなど、さまざまな切り口で地域との関わりを広げているところです。最初の頃はなかなか評価されなかったのですが、次第にさまざまな評価をいただけるようになりました。太陽光発電業界でも、JP（太陽光発電協会）などを通じて、地域共生の重要性が認識されるようになり、私たちのような取り組みに注目が集まってきました。現在は、「地域循環」をキーワードに、地域内外の人・物・電気・思いをつなげる取り組みを進めています。たとえば、電気を購入してくれる企業に対しては、農作物の購入や、福利厚生としての施設利用など、多面的な関係性を築いています。こうして、街と田舎をつなぐ新しい循環の形を作っています。



今、新たに 5 ヘクタールほどの農地を活用して、「食とエネルギーのテーマパーク」という構想を進めてい

ます。すでに1.4ヘクタールは管理していますが、周辺の農地もほとんど放棄されているため、一体的に管理し直そうという計画です。そこを生産・交流・教育の拠点とし、より多くの人が関われる場所にしていきます。これは、生活クラブとの共同プロジェクトでもあり、一緒に合弁会社を設立して取り組んでいます。ただし、生活クラブに限らず、もっと多くの方々に関わってもらいたいと考えています。ここで学んだことを自分の地域に持ち帰り、例えばソーラーシェアリングを始める——そんな連鎖が広がる拠点になることを願っています。現在はブルーベリーを中心に、ブドウ、イチジク、レモンといった果樹も育て始めています。まさに、こうした動きがスタートしたばかりの段階です。

私自身、ホールアースを辞めた時は、自然学校のような活動にはもう関わらないと思っていました。そのくらいの覚悟で一度離れたのですが、がむしゃらにエネルギー事業を続けてきた中で、奇しくもこういうソーラーシェアリングをやることで、また自然とこの方向に戻ってきた気がします。ですので、まさに里山コモンズ的な活動というのを、ちょっと隣接したテーマでやっているという風に思います。

大武：山川さんありがとうございました。改めて、山川さんの事業紹介を聞いて、本人もおっしゃっていましたが、ぐるっと回ってまた自然学校へ戻ってきたと。それが今度は「里山コモンズ」的な形で、ここに神奈川県・相模原でも事業として展開されているのだなと、とても嬉しく思いました。今までずっと、里山コモンズ

自然学校、そして山川さんの発表を聞いてきたのですが、ここで宮垣先生にコメントをいただけたらと思います。先ほどの古本さんの発表の中で、「里山コモンズ自然学校」という新しい取り組みの中で、従来の閉鎖的なものとは異なる「開放性」「多様性」「緩やかさ」というキーワードが出てきて、なるほどと思ったのですが、実際に地域の中でそれを行おうとすると、さまざまな圧力や抵抗があると思うのです。NPOとして市民活動を見てこられたご経験の中で、「開放性」「多様性」「緩やかさ」といったものが大切だとわかっていながらも、現実には難しい課題に直面している。その突破の鍵や、NPOの活動の中でうまくいっている事例があればご紹介いただきたいです。また、「里山コモンズ自然学校」についての率直なご感想やコメントもお願いできればと思います。

宮垣：お二方のお話をほぼ初見で伺ったので、まず率直な感想から申し上げると、「どっちにも行ってみたい！」と思いました。そう感じた方は多いのではないのでしょうか。素敵な空間と取り組みに、自分も身を置いてみたいと思わせてくれるような活動だったと感じます。

山川さんの話は、株式会社という形態でありながらも、極めてNPO的というか、社会課題に向き合っているという点で、非常に共感しました。しかも、「里山こそ社会課題の最前線」と聞いて、なるほど確かにそうだなと思いました。そこに関わることで見えてきた課題や資源、関係性が、事業の展開につながっている。名前としては「ファーム」だけれど、ほぼ何屋さんかわからないというのがむしろ素晴ら

しくて、いろんな角度から、いろんな顔を持っている存在。今の社会にとって非常に必要なイノベーティブな存在であり、ヒントになる動き方をされていると感じました。

「コモンズ」という言葉についてですが、これは単に場所やある種の状態を指しているわけではなく、すごく動的で、変化し続ける、共有地化するプロセス全体を指しているのではないかと思います。つまり、「これがコモンズです」と固定されたものではなく、常に再定義され続けるもの。これによって、言葉の古いイメージから脱却できるのではと思います。「コモンズ」という言葉を使うと、「何を共有するのか」「誰が共有するのか」「どうやって共有するのか」といった点が気になりますよね。おそらくこのコモンズという考え方は、多くの自然学校で共有できる考え方だけれど、誰が共有するかは地域や活動によって異なる。そして、どうやって共有するかということも、それぞれの個性によって違ってくる。また、「何を共有するか」についても、空間や森といった物理的なものを思い浮かべがちですが、実際に皆さんが話していたのは「活動」だったと思います。そこには人が関わっていて、何らかの経験をすること、それを含めて共有する。つまり、社会の中で生きていくうえで大切な価値が、そこにあるということが見えてくるのかなと感じました。思いつきのようなことも言ってしまいましたが、そのような感想を持ちました。

大武：宮垣先生、ありがとうございました。今のお話の中で特に印象に残ったのが「動的なプロセス」という言葉でした。自然学校や里山の取り組みも、常に変化し続けています。その一瞬

一瞬を切り取る場面もありますが、その変化し続けるプロセスをどう捉えるかという視点の大切さを改めて感じました。そして、時間ももう 4 時近くになってきたので、限られた時間の中での議論になりますが、「里山コモンズ自然学校とは何か」というところから始まったこの議論を、もう少し NPO という視点に移していきたいと思います。

今日の場合は「森の学校の 20 周年」でもあります。私自身も今回、「NPO とは何か」ということを改めて問い直す機会となりました。宮垣先生のご著書のタイトルも『NPO とは何か』でしたが、これからの里山コモンズ自然学校の未来を考える上で、我々 NPO の在り方ももう一度考えていきたい。そこで、まず山崎から、改めて「NPO とは何か」「NPO はどんな役割を果たしてきたのか、果たすべきなのか」という点について触れてもらえますか。

山崎：NPO という言葉は、だいぶ世の中に広まってきましたが、理屈上、すべてが市場経済でうまく回るという前提がずっとあったわけです。でも、それだけでは解決できない課題が出てくる。環境問題や格差の問題などですね。そうした中で、「それを補うために税金を払って行政に託しましょう」というステージに移ったわけですが、行政も完璧ではないし、税金にも限界がある。だから、こぼれ落ちる部分が市民に直撃する前に、NPO がそこをサポートするという役割を担うようになってきた。ろうきん森の学校の活動を見ると、自然を調べたり、木を植えたり、切ったり、自然観察をしたり、そうした見える活動の背景には、地域の課題や困り

ごとがありました。共助、助け合い、相互扶助、共有などのキーワードが出てきたように、そういった価値を背景に、全国各地で20年間活動を続けてきた。そうした活動を、労働運動を背景とする福祉金融機関であるろうきんが支えてきた。そして、その連携先がNPOであるという点。ここに、今後の学ぶべき点や、20周年を機に整理すべきことがあるのではないかと考えています。

今日は宮垣先生にもご参加いただいていて、『NPO とは何か』という著書も出されていますので、「誰が」担うのかという観点から、中心を担ってきたNPOという存在について、ぜひ先生の視点からお話をいただければと思います。ろうきん関係者も多く参加していますので、持ち帰れる学びが色々あるのではと思います。

【宮垣先生の話】NPOの歴史と特徴

今から5分10分お時間いただいて、お話をしたいと思います。NPOとは何かという話について、一緒に考える時間になればいいのかなと思います。ご覧いただいているのは私が勤めている慶應義塾大学のキャンパスで、ひろしま自然学校さんと同じく、環境省の自然共生サイトに登録されました。

多分呼んでいただいたのは、ご紹介いただいた本『NPO とは何か』を出させていただいたことがきっかけだと思います。何でこういうタイトルで本を出さざるを得なかったのかなっていうところもお話できればと思います。要するにNPOって言葉は先ほど申し上げたように、言葉自体は知っていて、なんかみんなNPOと言えるようになってきました。私が阪神淡路大震災の時にNPOって言ったら、それはNHKと何が違うのだとか、ODAと何が違うのだとかですね。3文字のアルファベットは

何が違うのだって必ず言われました。それからすると、時代が変わったなという風に思うのです。けれども、同時に当たり前になってはいるけれども、理解としては全然当たり前になっていなくてですね、言葉は知っているけども、よくよく考えてみると何のことよくわからないという、社会状況があるのかなと思います。そういったこともあって、改めてこの問題について考えてみようというのが、この本の元々の企画意図だったわけです。

私は企画の時に「NPO とは何か」というタイトルにしてくださいと編集から言われたのですが、頑として断って、「そんなことは答えられるわけがないから無理です」とずっと言い続けたのです。「いや、とにかくこのタイトルで」ということで、こうなったということなのです。でも振り返ってみると、全編を通して「NPO とは何かだろうか」ということを、いろんな角度から考えてみることができました。先に申し上げると、別にここに答えが書いているわけでは全くないのですが、でもいろんな角度から見ることによって、私たちがなんかすごく距離感があるなと思ったNPOが、実は非常に身近な存在で、社会にとっても不可欠な存在だということは、少しでも伝わればいいなと思って書いた本です。

先ほど申し上げたように、そのNPOを取り巻く状況というのは、NPOに関わる人間からすると今更そんなこと問われる必要ないよと思うぐらい当たり前ののですが、さっき感想で「何かいかがしい存在じゃないか」ということがありましたけど、それは冗談ではなくて本当にそういう風に思う人はいっぱいいるわけです。UFOと一緒に、得体が分らないと怖いって思うのですよね。大体そういうものですよ。だからその得体が分らないから怖いって風にして、怖いから何か怪しい

とか思いがちなので、それは多分、実態が理解されていないからそういうことが起きているのかなという風に思います。

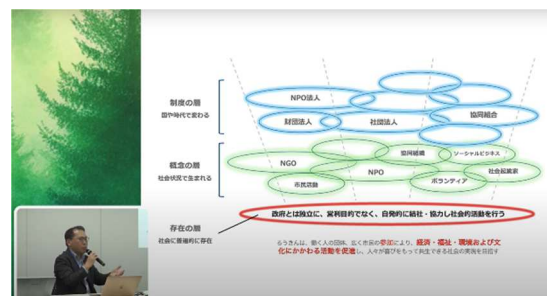
とはいえ、NPO 法人だけで今、5 万弱ぐらいあります。もう少し広げて公益社団・公益財団で大体 1 万ぐらいです。一般社団・一般財団法人で 10 万ぐらいです。本にも書きましたけど、コンビニの店舗数が大体 5 万数千ぐらいですからそういうこと考えると、本当は身近に実は存在しているけど、気づいてないか見えていないか、そういう状況なのだと思います。それだけ当たり前になっているのだけども、先ほど申し上げたようにちょっとよくわからないなっていうことがある一方、ろうきんさんがまさにそうなのですけども、一緒に何かをやろうっていう実態も、ニーズもそれから多分長い目で見るとこれはどんどん高まっていく方向にあるのだろうと。

NPO とは何ぞや、の話をする前にいろんな言葉が並べて申し訳ないのですが、NPO の仲間たちという言い方がいいでしょうか。NPO という言葉に付随するかどうか、NPO 的なものと言うのでしょうか。そういうものをざっと海外で用られている概念もそうですし、日本で用いられている概念もそうですし、色々あげてみました。NPO という言葉もあれば、NPO 法人というものもあるし、認定 NPO 法人というものもあるよねと。違いはよくわからないなっていうこともあるかも分かりませんが、ヨーロッパなんかに行くと非営利と共同組合は非常に近い距離感にありますから、ヨーロッパに行くと非営利・協同セクターみたいな捉え方をします。すると共同組合は仲間か、みたいな感じになってきます。最近で言うと、労働者共同組合っていうのが法人格を得られるようになりましたし、それから考えたらソーシャルビジネスって言葉もあるねとか。非営利セクターという言い方もあるねとか、いろんな言葉遣いで語られ

てきてこれを 1 個 1 個定義していくことは、学問的にはとても大事かもしれないのだけど、多分それをやっても逆に理解が複雑になってしまいます。例えばこういう風に理解したらどうですか、というのがこのスライドです。

簡単に 3 つに分けていますが、本当はもう少し複雑なのだろうと思います。要するに社会にそもそも存在しているものは、おそらく社会っていうものが立ち起こってきた時からあったかもしれない。それは何かと言うと、政府とは独立した存在であって、政府が作ったわけじゃなくて、でもなんかこれで儲けなきゃいけないという存在でもなく、だれども必要だね、あるいはやりたいね、というところで人が集まってできたものです。

自分のためだけでなく、誰かの利益



にもなるような活動っていうのは有史以来、多分ずっとあるのだろうと思います。逆にいうと、この活動がなければ社会は成り立たなかったはずだと思うのです。その上にいろんな形態の活動が出てくるので、それを NPO と言ってみたり、ボランティアと言ってみたり、ソーシャルビジネスと言ってみたり。時代時代、あるいは国によって言葉の入れ替わりみたいなことがあったのだろうと思います。それが概念の層と書いているものです。それが実態化していき、これはとても大事だから社会的にそれを支えられるような仕組みを作りましょうとなってきました。じゃあ NPO という存在がこれから必要だから、NPO 法なるものを作っていきませんか。あるいは

NPO 法ってということだけではうまく法人格として全部掬いきれないので、一般社団法人という法人格を作りたいとか、いろんな形で制度化されてきました。

国によって当然変わると思います。書いているのは日本の状況の話です。大事なことはあの繰り返しますけど、上を見るのではなくて、この下の赤いところの話です。こうやって捉えると、例えばろうきんさんは、私も今回ご縁をいただいて勉強させていただいたのですが、そもそも「働く人の団体で、広く市民の参加によって経済・福祉・環境・文化に関わる活動を促進し、人々が喜びを持って共生できる社会の実現を目指す」ということですから、まさにこのことを言っているの、ということはその広い目で見ると NPO とうきんはある意味において、非常に共通性を持っている。同じセクターという言葉はちょっと誤解があるかも知れませんが、同じセクターの中にいる仲間であるという位置づけで十分可能だろうというのがここでの整理です。

NPO が普遍的かという話の例によく学生に出して、「あ、そうかっ」と言われるのは、皆さん Wikipedia 使いますよね。Wikipedia ってどうやって成立するかっていうと、記事書いている人はみんなお金もらっているわけじゃないですよね。ボランティアの人たちが一生懸命書いていて、誰かがさらにそれを上書きしてできている、壮大な知識ベースです。運営しているのは、米国内国歳入法 501 条(c)(3)認定を受けた慈善団体である、Wikipedia 財団ですからもう立派な非営利組織です。言ってみれば NPO なわけであって、あるいはオープン AI なんかも元々 NPO として立ち上がりましたので、我々の社会、少なくとも現代社会において NPO の存在がなければ、結構不便なことがもう既に起きているのだ

ということも、補足的に知っておいていただくといいのかなと思います。

とはいえ、やっぱり分かりづらい存在で、なんで分かりづらいのかという話なんですけど、NPO の N は「Non」ですよ。ね。「Non-Profit Organization」ですよ。ね。NGO と言ったとしても「Non-Governmental Organization」で、Non から入ります。日本語で言うと「非ず」ですよ。ね。僕らの業界ではこれを「ノンの悲劇」ってよく言うのですが、なぜ悲劇かというと、その非ずから定義される言葉って難しいと思いませんか。大体こう「非」だから、それ以外のもの全部入っちゃうわけですよ。だから一生懸命枠組を作って説明をしようとしても、例外がどんどんできていく。存在を何とか定義しようとしているという、非常に存在と定義のなんか矛盾みたいなものが、そもそも含まれている存在なわけです。だからいけないってわけじゃなくて、だから面白いのだと私は思うのですけれども。その非ずという存在の難しさ、もう少し言えるならば、その枠組を逸脱していく存在、ある定義をしてもそこに含まれていかない部分が必ず出てきてしまう。あるいは越境していく、ということが出てきてしまう。先ほど山川さんの話で NPO 的だと私が申し上げたのは、さがみこファームというところで活動しているのだけでも、どんどん自分たちの定義を塗り換えていくような展開をしていらっしゃる。この意味では、とっても公的な存在なのだろうという風に思うのですよね。

漢字いっぱい書いていますけれども、僕らが知っている企業観と言うのですかね、組織観って言うんでしょうか、もしかするとうまく当てはまらないかもしれないし、制度観にもうまく当てはまらないかもしれない。でも、実際に存在しているわけなのでそれはもしかすると、我々が持っている定

義のほうを少し疑った方がいいのかもしれない。ということが1つ目です。

それから一方で、もう1つの悲劇性なのですけども、非ずって言っていることで、しかも非営利と言葉がついているので、無償とか無報酬とか、そのイメージをどうしても持ってしまうのです。そうするとそういった団体にお金の話をすると、突然すごいギャップから来る、いかがわしさになってしまうのだけども、それはそもそも誤解だという話が大事です。非政府組織もそうで、昔は「非政府組織です」というと「反政府組織ですか」って冗談抜きで言われていた時代もあり、学生なんかそういう反応されていたんですけど、いや非政府というのはと反政府というのは違うのだよ、と。もしかすると、時の政府に親和的な活動もあるかもしれないし、そうじゃない活動もあるかもしれない。

大事なことは、政府がコントロールしているのとは違う立場で、独立して活動していることなのだよという話をよくします。それから、既存の組織観とか制度観と当てはまらないということと言うと3番目ですけども、これは企業との対比でイメージしていただくと良いと思うのです。そもそもNPOって存在は「非ず」でありながら、同時にすごく強烈な価値観とか社会観とか、そういったものにコミットする組織ですよ。自然学校もそうですし、福祉の活動もそうですし、子育てもそうですけども、「こうあるべきだ」「こうしましょう」っていうところで活動が起こっていますので、そういう意味では無色透明な存在じゃないのです。

一般的に、特に大きくなればなるほど、なるべくそういう特定の価値観とか特定の考え方とは距離を置いて、なるべく無色透明でありたい存在になるのだと思うのですけども、NPOって存在はそれとは違って、逆に中立的な存在をやめた組織だって

いうことがポイントなのかなという風に思っています。補足的に、「良いNPO、悪いNPO」っていうふうに書きましたけど、NPOがいかがわしい、もしそういうイメージがあるとするならば、それはNPO全体がいかがわしいわけじゃなくて、いかがわしいNPOもあるかもしれません。でもそれはいかがわしい企業があるのと全く同じことであって、あるいは尊敬されないような国や政府があるのと同じことであって、良い組織・悪い組織があるのと全く同じことです。だから、尊敬されるNPOもあれば、そうじゃないNPOも当然出てくるのだという捉え方をするのが、おそらくフェアな捉え方なのだろうと思います。

ちょっと駆け足でお話をしましたけど、山崎さんの問いにちゃんとリプライできていますかね？

山崎：この辺の整理がよくわからぬまま「NPOとの連携」って話が進むと、なかなか混乱が生じるかなと思ったので、ありがとうございます。

大武：NPOの当事者である我々も、非常にうなずくこともあるし、「やっぱりな」とか、「そこはまだ課題だな」という、非常に共感というか同意することがたくさんありました。今、宮垣先生の「改めてNPOとは」という話を受けて、実際に現場でNPOの当事者として関わっている渡邊さん。今のお話で「そうそう」と共感や、「でもそこはちょっと違うかも」って思ったのでは。いかがでしょうか？

渡邊：普段、NPOではあるのですが、NPOだということをあまり意識せず活動をしておりまして、「ああ、そういうことなのか」と。ろうきんさんとの繋がりがみたいな共通したコン

セプトがあるというところも、すごく嬉しいなと思いながら話を聞いておりました。宮垣先生がおっしゃっていたところの、「価値や信念を強く含んでいる」というのは、本当に NPO の大事なことだと思います。それでありながら、今まで信念は持ちながらも、なんか存在は中立でありたい、みたいなところがあって、「1 人の村人になるな」って昔よく言われたのですね。高齢化が進み田畑が荒れていて、何とかしたいという課題に対して、「じゃあ、私が助けに行きます」というのは、村人が 1 人増えただけで何の解決にもなっていない。でも、私たち NPO だったら、1 人の村人にならず、中立的な存在として、その課題に対して「1 人じゃない何を作るか」。例えば皆さんにお手伝いいただいたのと同じように、私たちは間をとって繋げる役割で、どなたかとどなたかを結びつけるとか、私たちが活動をコーディネートしながら一緒にやっていたくとか。そしてそれが継続していくためには、今度どうしていこうか、というような組織づくりまでとか。そういうことを繋げていくのが NPO の役割かなと思っています。やはり私たち、先ほども言いましたけど、村で活動が続けていく中で、いろんな課題が出てくる。どうしても入り込みたくなる、感情移入もあったりとかする中で、スタッフは特にそうなのですが、それに共感して、やっぱりいろんな仲間たちや協力してくださる方が集まる。そういう人たちを上手に、「やりたい人がやりたいことを、強制ではなく、うまく繋げていく」。先ほど山崎さんも言っていたけど、「コーディネート能力」。それを上手にやっていけるようになる

と、私たちもいいかなと思いながら、今、お話を聞いていました。

大武：今コーディネート力っていう話を出していただきました。山崎にまた振ろうと思うのですが、一方でろうきん森の学校が 2005 年に始まった時、「企業と NPO による協働事業」とか「CSR」という文脈でのスタートだったのです。それから 20 年経ってきている中で、山川さんのように株式会社という法人形態ではあるけれども、極めて森の学校に近いような活動も実際されています。じゃあ我々 NPO って一体何なのだろうとか、どういう立ち位置であるべきなのだろうってところが、多分皆さん中にもこうグルグルこう出てきていると思うのですが、やっぱり NPO 側の全体的な問題って、そういったところにやっぱりあるのですかね？

山崎：今日私自身は、ホールアース自然学校の代表としてここにいますけれども、名刺をもう 1 つ持っていて、「日本 NPO センター」の副代表理事にもなっています。NPO っていうところに身を置いている人たちが、痛烈に感じているのは、大武が申し上げた通りなのです。しかしながら、昔はぐいぐい経済を進めていく株式会社のオルタナティブとして、そこからこぼれ落ちるものを拾う存在が NPO ということで、非常に分かりやすかったのです。連携をする意義もそこにあったのです。ところが、だんだん世の中は課題がもう山積みになってきてしまっていて、企業は金だけ儲けてればいいってことはどの企業も言わなくなって、やっぱりサステナブルとか持続可能性、

ネイチャーポジティブっていうことを経営理念のかなり上の方に置くようになってきました。そういう意味においてはその昔 NPO が言っていたことにぐっと近づいてきた。逆に NPO はボランティアで、地域主義で、フットワーク軽いっていうところで、どうしてもお金的な持続可能性が立ち行かないので、企業のやり方を真似てきたのです。

企業が NPO 化し、だんだん NPO が企業化してきているっていうのも一方であるのですね。そうすると企業は NPO 化して NPO は企業化しているので、結局同じようなセクターになりつつある。これをいいと見るか悪いと見るかというのは、多分いろんな分析があると思うのですけれども、いずれにしても世の中は今、そういう形になってきているのじゃないかなと思っています。では、互いに歩み寄ってきたのであれば、なおのこと協働して化学反応を生んで、より良い社会にどんどん近づけていかないと、やっぱり地球の悪くなっていくスピード感に追いつかないのじゃないかということです。今一番のテーマになっているのは、NPO から見たら歩み寄ってきた企業とどううまくここで協働していくかという、要は飲み込まれずに上手に協働して行って、社会課題解決のスピードをスパイラルアップしていくのがものすごく大事なのです。そういうタイミングなのかなという気がしています。もう 1 個、これは宮垣先生の本にも書いてあるのですが、とはいえこぼれ落ちる社会課題っていうのが出てくる。ここを拾う NPO でありたいっていう、そこのマインドとしては、企業と共にあるっていうだけじゃなくて、誰かが拾わなきゃいけないでしょ。その NPO であるっていうところ

も、やっぱここも考えなきゃいけないのかなっていう感じでしょうか。

宮垣：今、補足していただいたのはその通りだと私も思っていて、ちょっと大げさな言い方で「最後の砦」だって言い方をよくするのですが、その誰もが本当は必要なんだけど、収益っていうことからするとやっぱりできないし、政府は公平性が税金を使ってありますから、全てのものにどうしても対峙できないし、対応できないってことがあります。そうするとどうしてもいろんなところでこぼれ落ちると言うのでしょうか、誰も見てもらえないような課題というのはあるし、それが増大していくのが現代社会だと思います。

そういう意味では、誰が見るのかと考えた時に、やっぱりそれ必要だよねという風に声をあげる存在がいけない。課題は課題として存在していなくて、これは課題ですよって言って初めて顕在化するのです。NPO 活動の 1 つの大事な点は、その課題解決ってこともあるのですが、まずここに課題があります、あるいはここに問題がありますって、いうことを行動することによって世に知らしめるという意味ではとっても大事なのだらうなと思います。

2 つ目はその前段の話なのですが、私はよく最近「クロスセクター」という言い方をしています。あまりセクターと言ってこう線を引くのもそういう時代でもないのだらうなとは思いますが、とはいえ NPO と何かの協働とか、企業と何かの協働とかっていう言葉が巷に溢れているので、そうであればクロスセクターで行きましょうという言い方をします。この時のクロスセクターっていうのは、一般的には社

会課題があって、その社会課題に向き合って解決するために NPO の得意技、企業が持っている得意技、あるいは行政ができること、というような形の組み合わせでもって解決しましょうという話で、それは王道だと私は思うのです。けれども、クロスセクターのあり方でもっと多様だと私は思っていて、課題解決だけじゃなくて人の交流だってクロスセクターだと思いますし、あるいは何らかの商品開発みたいなことだってもしかしたらできるかも分かりません。

NPO の現場は、イノベーションの芽が山ほどあるわけであって、でもそれは NPO として別にそれを商品化しようと思っているわけじゃない、サービス化しようと思っているわけじゃない方も多いかもしれないのです。けれども、そこがもしかすると企業が入ることのできるかもしれない。そうすると経営戦略的なところにも関わっていくかも分かりませんよね。それから NPO の優れた利点は、掛け持ち可能だってことだと思うのですよ。最近企業の副業のあり方がだいぶ変わってきていると思うので、複数の名刺を持つということが少しずつ増えてきたかなという風に思うのです。特に企業とか会社勤めの方が一緒に同じ人生の中で NPO 活動に関わるってことはできるわけであって、企業は定年があるのだけれども NPO は原則的に定年をあまり考えないと思うのですよね。そういう意味では長い人生を考えた時に、企業人でありながら会社員でありながら同時に NPO に関わっているってことが、いかにその人の人生にとってあるいは家族にとって、大きな意味をもたらすのかと考えると、クロスセクターのあり方っていうのはいろんな接続の仕方があるのだ、これはまだまだ工夫

のしがいがあっていくらかでも提案していける世界かなと、私は思いました。

大武：クロスセクターっていう言葉をいただきましたけど、そういう意味ではもしかしたら株式会社とか NPO 法人とか、一般社団法人とか、あんまり特定の法律とか制度に紐づいた枠に僕ら自身が囚われすぎているのかもしれないと話聞いて思いました。山川さんにコメントいただければと思うのですが、さがみこファームで地域の課題解決に取り組んでいる中で、株式会社という形態でチャレンジされているけども、NPO とか意識はしてないのかもしれないけれども、森の学校で取り組んでいるような里山での課題解決に今チャレンジしていく中で、組織とか法人のあり方についてどう考えていますか。山川さんにとって NPO 的っていうのはどういうスタンスなのでしょう。

山川：どうですかね、NPO 的かどうかっていうのはちょっと分からないのですが、個人としてはそんなに法人格っていうのは意識してないですね。ただその法人格ができていうのは、それなりにやっぱり理由があるので。それぞれの必要性に応じて法人格ができてきている。それで会社法が改正になってまた新しい法人格 ができるというのは、時代によって変わってくるものだと思うのですよ。ですから、箱をどう使うのかっていうだけの話であって、その人のスタンスにバチッと合うものがあればそれでいい。けれども、完全に合わなくてもなんとなくその大まかに合っていれば、こっちにしとこうかな、というぐらいの感じ

で、実際自分は株式会社を選んでいきます。例えば発電の会社っていうのは、これは明白でアセット（資産）を持つということなので、これはNPOではなかなか難しいことなので、株式会社にしました。農業で言えば、もちろんNPOで農業そのものはできるのかもしれないですけども、ちょっと機動的に動きたかったっていうのもあって株式会社でやっている中で例えば、いわゆる体験的なことやっている上ではそんなに不自由は感じてないです。ちょっと特異かもしれないのですが、ご寄付をいただくことがあるのです。これはお付き合いしている会計士さんから言われたのですが、「株式会社としては極めて珍しいね。むしろ寄付をする方じゃないのですか。」と。そういう寄付をしたくなる存在であるのかもしれないですけど。結果的にそういったご寄付をいただくことっていうのはありますね。そういう意味では、認定NPO法人にしたら税制優遇が受けられるとか、そういう制度的なメリットがNPOの方があります。NPO業界にいたら

「NPOとは」というのはすごく考えるのでしょけれど、語弊があるかもしれませんが、今はどっちでもいいよ、という感じでしょうか。

法人格云々というより、例えばろうきん森の学校って、まさに地域に根差した活動じゃないですか。地域と付き合っていく上で、組織の規模は意外と大きななと思っているのです。ろうきんさんは、直接支援することが難しいからNPOと協働して始めたのですけど、仮に直接支援ができたとして、そのまま企業が直接地域に関わってこの活動ができたかどうか。こういうことを考えてみて欲しいのです。そうした

時にむしろ地域で小さな組織が機動的に動く、地域と関係を築いていく方がうまくいくかもしれないなど。ただし、人やお金とかは大きなところと組むことで活動が拡大することっていうのはあるので、じゃあそれを規模の大小や、地域にどれだけ関わるのか、その辺りに結構、得手・不得手があり、うまくいくことと・いかないことがあるのだろうなと思います。法人格よりそうした要因のほうが大事な気がしますね。

大武：そうですね。今、本当に地域にどっぷりという意味で渡邊さんに、適正規模感とか地域から企業がどういう風に見られているか、という経験があればお話してください。

渡邊：多分、おっしゃる通りだと思います。いきなりパツと入ってきても、企業がやりたいって入ったとしても、どちらもお互いをうまく話せないところがあると思うのです。しかし、私たちの1番大事な役割が、その間を取り持つところだと思っているのです。私たちも、最初は自分たちが地域に入るのに苦労した経験があります。私たちもやっと村の方と話ができるようになり、そして私たちが紹介してくれるのだったら一緒にやってもいいよ、って言ってもらえる関係性を少し作ることができたと思っています。ろうきん森の学校の活動に際しても、くわどり市民の森というところで最初始めたのですけど、そこは上越市の持ち山なので土地自体は地域の方は絡んでないのですけれども、そこでろうきんさんが森の学校をしますって言った時、じゃあここで私たちも一緒にやろうって、地域の方が協力してく

ださったという経緯がありました。私たちと一緒にやりましょうって言って賛同してくださる方は、ろうきんさんの信頼感もあってすごく入りやすかったのじゃないかなと感じています。

大武：話を聞いてホールアース自然学校のことを思い出しました。ホールアース自然学校はこれの中では比較的な規模の大きなNPOにはなっているのですが、まだまだ他の企業さんから見たら小さな存在です。結構やっぱりその地域とか特に学校なのですけども、学校って特定の企業に関わりたい・協力したいっていうと、「いやいや」と言って、どうしても壁があると思うのです。しかし、我々NPOが間に入ると「じゃあ、ホールアース自然学校が間に入ってくれるなら」という形で、学校への支援を企業と一緒にやるってことは、あったりするのですよね。そういう意味では、山川さんが言ってくれたみたいに、NPOの存在は地域と外との窓口という役割なのだと、改めて思いました。

時間が予定時間を過ぎてしまっているのですが、ここで何か結論じみたことが出せるとは元々思いません。しかし、最後に改めて「里山コモンズ自然学校としてのろうきん森の学校の意義」という大上段なテーマを掲げてはいるのですが、私の中では宮垣先生おっしゃっていた「クロスセクター」が印象に残りました。自分たちはこうだからという定義付けはもちろん大事だし、自分たちのアイデンティティは大事だなと思いつつも、でもそれに固執してはなかなかこう繋がる、繋げることもできないというジ

レンマというか、課題を改めて思いました。

最後に皆さんから、里山コモンズ自然学校として2025年度から引き続き続けていくということなのですけども、ここを大事にしたいとか、気をつけていきたいっていうことを、この場の感想も含めていただきたいと思います。まず、森の学校を卒業した山川さんお願いします。

山川：冒頭お話ししましたが、私は本当にろうきん森の学校に育てていただいたっていう感覚がすごく強いです。最初10年関わって、その後10年経ってまた呼んでいただけるということ自体、すごく嬉しいなと思いますし、これまでの20年を振り返って、この先の5年・10年をこう描いていく皆さんの活動を改めてお聞きして、いや本当に10年・20年の積み重ねなのだなと改めて感じました。フィールドは違うのですが、同じような仲間としてやっていきたいって改めて思いました。ろうきん森の学校、里山コモンズに期待するとすれば、今まで培ってきたものの、例えば地域との繋がりをどう作るのかとか、あるいは、「森を育む・人を育む・森で遊ぶ」活動がありますけれども、なんかこういった暗黙知化しているものをなるべく可視化して、そうすると他の地域でこういったことがまたやりたいと言った時の助けになるのだと思うのです。各地区はきっと今までの活動をさらに突き詰めることで、その価値というのが高まっていくと思うし、全国事務局はきっとそういった6番目、7番目の森の学校の活動を広げるお手伝いをするというのではないかなと思います。私も頑張りますので、

是非頑張っていきましょう。ありがとうございました。

古本：皆さん長い間話を聞いてくださってありがとうございました。里山で地域に泥にまみれてやっている側の話とか NPO 側の話を随分長く聞いてくださったと思うのですが、私たちが今後の姿を見直す時に、里山をどう活用するかという時にでも、町に住む多くの人は、里山なんて必要としていないのではないかみたいな話、諦めみたいなのところの話がよく出るのですけども、化石燃料を使って輸入した食品に頼ってってというような生活が当たり前になっている人たちも、今回米騒動があったりしますけど、改めて自分たちのちょっと近くにある、里山みたいなところの価値を見直していただけるようにするにはどうしたらいいのだろうと、日々考えたりしています。そういう時にやはりろうきんさんや労福協さんが、そういう無関心層の方も引っ張って、繋げてくださるってところが結構大きいのではないかなと思っています。是非、普段接しない里山に接しない町の方々が広く里山に来ていただくような、目に見えるきっかけを作っていただければなど改めて思いました。ありがとうございます。

渡邊：今日のお話の中で本当にたくさん言葉が刺さってきたのですが、やっぱり新たなコモンズという言葉の中で、緩やかなとか、多様性という言葉、これからやりたいなって思っていたことに繋がっていくと感じました。1つの活動に対して、こうしてくださいとか、これをプログラムでやりますというのを作るのはとても簡単なのです。けれども、いろ

いろな方がいろいろな立場で、いろんな考えを持って、私これならできるっていうものを、それを認めて支えながら活動を進めていくっていうのが、これからやっていきたいなっていうスタイルだと私も思っています。特に棚田に関わっていて、やっぱり棚田で一生懸命労働するのを助けてくださるのは、すごくありがたいのですけれども、それがやっぱり叶わない、でも自分は写真撮ってちょっと紹介することならできるとか、もうちょっと簡単なことならできるとか、色々な関わりを提案してくださる方もいらっしゃるのですね。それも全部棚田を支えるサポーターみたいな形で組織を作っていけるなど、この25年度の計画を考えながら思っていたところに、この言葉が出てきたので、ああよかった、私たちの考えはこれにちゃんと当てはまっているし、進めていけるなどというとても自信をいただきました。今日はありがとうございました。

山崎：森の学校が立脚しているこの農山村ってというのは、そこにしかない機能を持っているのですよね。機能もたくさん持っているけれど、課題もたくさん持っている。そして都会には都会の機能があって、ただそこには課題があると。この都市部、その里山がコモンズであるならば、その里山と都市ってところが上手に総互補完的であるといいなと、今日改めて思いました。どちらがいいとか悪いという話ではなくて、それぞれに機能や役割があって、それぞれに得意不得意があって、それぞれが補いあえるようにするためには、何よりも都市も農山村も元気であるってことはすごく大事です。私たちは普

段はいわゆる里山地域で暮らしているので、ろうきん森の学校の活動も含めて、一生懸命頑張っていくと。都市も持続可能な都市とはどのようなものかを考えていただく。それぞれが苦手分野をお互い補完し合う、これが、おそらく環境省が言っている「地域循環共生圏」のことだと思うのですけれども。おそらくこうやって相互補完的に日本をどう上手に持続的にしていくかというところなのかなと思います。ろうきん森の学校の話の話を今日ずっとしてきたのですけれども、なんか見えてきたのはそういうところかなと思いました。

大武：最後に、宮垣先生。今日初めて「ろうきん森の学校」というプロジェクト概要とこのディスカッションを聞いていただきました。率直な感想と、私たちへのエールいただければと思います。

宮垣：20年ですもんね。すごいことだと思うのですよ。全然まだ見えてないので、多分取り組みがこの時間の中で収まらない、いっぱいエピソードがあったのだろうなと想像します。ろうきんと自然学校を運営するNPOと一緒にやるっていうのは、もしかしたらもっといろんな可能性があるのかなと。例えば、資金提供があります、活動に参加します、でも活動も様々あって、いろいろな関わり方がある。実は結構感銘を受けたのは、広島地区の活動報告された方が、元々私は活動参加者だったという話で、山川さんも、元は森の学校で活動されていた。参加者側になってみたり運営側になってみたり、いろいろな関わり方をするとということまで含めて考えると、一緒にやると

いうことの豊かさっていうのは、もっと考えてもいいと思うし、そこに何か可能性を感じるなと思いました。これが1番言いたかった感想で、多分これは5年また10年って節目のところで、こんな関わり方をお互いしたのですよというところの豊かさが、さっき山川さんが可視化されればとお話されましたけど、可視化されていくとすごいいいのだろうなと思います。さらに若干欲を言うと、活動されている方の声をもっと私は聞きたいなって思って、ろうきんの皆さんあるいはろうきん森の学校をきっかけに、関わってきた方がいっぱい本当はいらっしゃって。活動者全体で言うと28万人ですよ。これすごいことで、ちょっとやそっとじゃ真似できないレベルのことになっているのだと思います。その28万人が得られた価値みたいな



こと、どう活動したかじゃなくて、28万人の方々がどういう価値を得て、それが自分の人生、それぞれの活動、暮らし方・生き方にどういう風に関わっていったのか。こうした声を集めて可視化していくと、それはすごいことになるのではないのかなと、感銘を受けながら参加させていただきました。自然学校ってAIじゃ一番真似できない部分ですよ。AIじゃ一番真似できない部分をやっていくっていう意味では、もしかするとこれからの時代の最先端に位置付けられるようになるかもしれませ

ん。さっき「里山は社会課題の最先端」という言葉がありましたけど、我々が一番向き合わなきゃいけないものが里山にだいたい詰まっているのではないかという感想を持ちました。

大武：宮垣先生ありがとうございました。私も横で聞いていて、すごいビシビシ刺さるというか、本当にいろいろ取り組んでいかなきゃいけないなと思いました。最後おっしゃっていただいた可視化していくとか、もっと多様な関わり方を提案し、実践していくということが、多分この25年度からの関係者全員に課せられた課題かなと思い、エールとして受け取りました。本当にありがとうございました。本当に話は尽きないのですけれども、もう時間の限りもありますので、本当に今日はお忙しいところ宮垣先生、山川さん含め、各NPOの皆さんもありがとうございました。

「里山コモンズ自然学校としてのろうきん森の学校」というテーマでしたけれども、ここにお集まりの皆さん、そして今日ここには来られていないですけれども、今まで本当に多くの方に支えていただきました。これからもろうきん森の学校を、今ここにお集まりの皆さんと一緒に続けていきたいと思いますので、これからもご支援ももちろん、本当にありがたいのですけれども、一緒にパートナーとしてそれぞれができる関わり方で、森の学校を続けていきたいと思いますので、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。今日は皆さん、本当にどうもありがとうございました。

以上